

幼児の道徳行為の実践における空想上の存在の影響

富田 昌平*・甲斐 優香**

The influence of a fantastical being on preschooler's actual moral behavior

Shohei TOMITA and Yuka KAI

要 旨

本研究では、空想上の存在を意識することが、幼児による道徳行為の実践（違反行為の抑制）に影響を及ぼすかどうかについて検討した。具体的には、幼稚園の年少児（3-4歳児）10名と年長児（5-6歳児）16名を対象に、彼らが違反行為への誘惑にさらされた状況下で違反行為（後ろを振り返って玩具を見る）を抑制できるかどうかを、子どもに人気の絵本に登場する「お化け」の絵に見られている条件（お化け条件）と誰にも見られていない条件（統制条件）とで比較した。実験の結果、年齢に関係なく、お化け条件の子どもは統制条件の子どもよりも違反行為をより抑制し、違反行為をより長く躊躇した。また、1人である間にお化けの絵を見つめることと違反行為を抑制することとの間にも関連が見られた。しかし、空想/現実の区別についての認識と違反行為の抑制との間には関連が見られなかった。これらの結果は、幼児期の終わり頃に道徳や規範の内面化へと至る過渡期において、空想上の存在を意識することの役割という点で考察された。

キーワード：道徳行為、抑制、空想上の存在、空想/現実の区別、幼児

問題と目的

道徳 (moral) とは、「ある社会で、人々がそれによって善悪・正邪を判断し、正しく行為するための規範の総体。法律と違い外的強制力としてではなく、個々人の内面的原理として働くもの」(大辞林第三版)と定義される。

道徳行為の源泉となる子どもの正直さは、最初、罰への不安や恐れから生じる。故に、幼児期初期の子どもは、罰に処されることがあまり予想されない状況に置かれた時、目の前にある物理的な誘惑に突き動かされて衝動的に行動してしまいがちである。その後、発達が進むにつれて、子どもの正直さは単に罰への不安や恐れから生じるのではなく、日々の道徳的鍛錬の積み重ねによって内在化された規範に基づいて生じるようになるという (Subbotsky, 1993)。

具体的に、Subbotsky (1993) は、子どもを違反行為への誘惑にさらす実験によってこのことを検討している。実験では、3~6歳児はピンポン玉を手を使わずにショベルを使ってA地点からB地点に移すという課題を与えられた。与えられるショベルは掬う部分が凸状

になっており、違反行為(手を使う)をしなければ決して掬うことができない仕組みとなっている。このような課題状況で大人が監視役として存在した場合、3歳児でさえも違反行為をせずに、与えられたルールを順守した。しかし、監視役が大人ではなく同年齢の子どもであった場合、3~5歳児の多くは誘惑を抑えることができずに違反行為を行った。対して、6歳児の約60%は監視役が子どもであってもルールを順守し続けた。

また、Subbotskyによる別の実験では、違反行為をしなかった子どもに対して、その後、違反行為をしたにもかかわらず、大人にルールを守ったと嘘をつき、まんまと報酬を手に入れた子どもの映像を見せ、もう一度課題を遂行させた。その結果、最初の課題でルールを順守した3~5歳児の3分の2以上が、映像を見た後では違反行為をしたのに対し、6歳児では大部分が再びルールを順守した。

これらの結果は、5歳以前の子どもによる道徳行為の実践(違反行為の抑制)は、「大人の目」という外的統制により突き動かされたものであることを示唆している。この場合の「大人の目」とは、物事の善悪を判断し、正しい行いには報酬を与え、悪い行いには罰を与える

* 三重大学教育学部

** 四日市市立内部保育園

存在の目である。「子どもの目」にはそうした力はないと見做されているため、外的統制として働かなかった。また、5歳以前の子どもは、「大人でも必ずしも全てを見通す力を持っているわけではない」という事実を目の当たりにすると、2度目の機会では違反行為を行った。このことは、彼らの最初の道徳的行為の実践が、単に「大人目」を意識したものであるという仮説を改めて強調するものであった。他方、6歳児はそのような状況に置かれた場合でもルールを順守し続けた。故に、彼らの道徳行為の実践は、単に「大人目」により引き起こされたものではなく、彼らの内面化された道徳や規範、いわば「内なる目」によって引き起こされたものであることを示唆していると言えよう。

このように、幼児期の終わり頃になると、子どもの道徳行為の実践は外的統制だけでなく内的統制によっても促されるようになる。岩田(1998)は、5、6歳頃になると、子どもは現前の他者の目を意識するだけでなく、内在化する他者の目も意識し、そのまなざしや声によって自己の行動を律することが可能になると述べている。実際、この頃になると、子どもは目の前にある物理的な誘惑に対して、自己を律する様々な方略(例えば、誘惑対象から目を逸らす、別のことを考える、自分自身に語りかけるなど)を使用することによって、それを避けることができるようになる(e.g., Mischel & Mischel, 1983; Yates, Lippett, & Yates, 1981; Yates, Yates, & Beasley, 1987)。神田(2004)は、この時期の子どもの姿を「思いをめぐらす5歳児」と呼んで特徴づけたが、まさに自己を客体視しながら様々に思いをめぐらす(考える)ことで自らの行動を調整し、目標達成に向けて努力することができるようになる時期であると言えよう。

しかし、冒頭でも述べたように、「誰かに見られているからではなく、誰かに見られていなくても、正しいとされることをやる」という道徳行為の実践は、そう容易に達成できるものではない。従って、道徳や規範の内面化に至るまでの過渡期において、子どもは外在とも内在とも異なる中間領域の存在のまなざしや声を意識し、そのことが彼らの道徳行為の実践を促していく可能性も考えられる。例えば、「サンタクロースは悪い子にはプレゼントをあげない」「親の言うことを聞かないとお化けがやって来て、悪い子をお化けの世界に連れて行く」「閻魔様はよい行いをした人間を天国に送り、悪い行いをした人間を地獄に送る」などの話を、子どもはしばしば幼児期に親からの口頭伝承によって聞かされる。ここで提示されるサンタクロースやお化け、閻魔様は、まさに外在とも内在とも異なる中間領域の存在、すなわち、空想上の存在である。そうした目に見えないが子どもにとって確かに存在すると是認される

空想上の存在を頭の片隅に置くことによって、子どもの道徳行為の実践が促されていくということは、幼児期の子どもを持つ家庭においてしばしば観測されることであろう。それらは最初こそ、空想上の存在による罰への不安や恐れに動機づけられた行為かもしれないが、外的統制から内的統制への橋渡しとなり、やがては道徳や規範の内面化に役立つものと思われる。

実際、空想上の存在を意識することで道徳行為の実践が促されることを示唆する研究が、近年いくつか報告されている。例えば、Bering, McLeod & Shackelford (2005)は、幽霊が同じ部屋にいると信じ込まされた大学生は、そうでない大学生よりも、競争的な実験課題で不正を働くことが有意に少なかったことを明らかにしている。また、Shariff & Norenzayan (2007)は、宗教的な単語(例: 神、聖なる)を事前に目にした大人は、ニュートラルな単語を事前に目にした大人よりも、後に行ったエコノミック・ゲームにおいてより寛大さを示したことを明らかにしている。

子どもを対象にした実験研究としては、Piazza, Bering, & Ingram (2011)の研究が挙げられる。彼らは5~9歳児に、違反行為をせずに達成することは困難であるような課題を与え、①目に見えない空想上の存在(プリンセス・アリス)に見られている、②現実の大人に見られている、③誰にも見られていない、といういずれかの条件に子どもを置いた。プリンセス・アリスとは、自分の姿を消すなどの特殊な能力を持つ魔法界のプリンセスで、決して恐ろしい人物ではなくフレンドリーな人物で、目に見えないけれど部屋の隅にある椅子に座っていると説明された。実験の結果、子どもの道徳行為の実践(違反行為の抑制)は、空想上の存在を信じることと関連があった。プリンセス・アリスに見られていることを意識した子どもは、現実の大人に見られていた子どもと同程度に、違反行為を抑制した。また、プリンセス・アリスの存在を信じた子どもは、それに懐疑的であった子どもよりも違反行為を抑制する傾向があり、その程度は現実の大人に見られていた場合よりも高かった。プリンセス・アリスの存在に懐疑的であった子どもも、それが現に存在しないことを探索的に確認する(例: プリンセス・アリスが占めていると思われる空間に手を伸ばす、椅子の表面をなでる、椅子を凝視する)まで、違反行為をすることを躊躇した。これらの結果は、空想上の存在を意識することは子どもの道徳行為の実践を促すことを示唆するものであった。

その他にも、空想上の存在ではないが、ぬいぐるみに見られていることを意識した場合に、大人が見ている場合と同程度に違反行為が抑制されるという研究結果も報告されている。杉村・古野・平木(1998)は、3、

4歳児に、新しい魅力的な玩具で遊ぼうと誘いかけ、彼らの背後に玩具を置いた後、実験者が忘れ物を取りに行き行って戻ってくるまで、後ろを振り返って玩具を見てはいけないと伝えた。その際に、子どもは①ビデオカメラ越しに先生に見られている、②ぬいぐるみに見られている、③誰にも見られていない、といういずれかの条件に置かれた。実験の結果、ビデオカメラ条件とぬいぐるみ条件は統制条件と比べて違反行為が少なく、仮に見た場合でも「見た」と正直に話す子どもの割合が多かった。この研究は空想上の存在を扱ったものではないが、ぬいぐるみを生きた監視役として擬人的に意識することで、道徳行為の実践（違反行為の抑制）が促されたとも捉えることができ、示唆的な研究であると言えよう。

以上のように、幼児期の道徳行為の実践における空想上の存在の影響に関する研究は、その数こそ多くはないものの、これまでいくつか行われている。しかし、それらは日常に馴染みのない存在であったり、空想上の存在そのものを扱っていないなど、十分に検討されてきたとは言いがたい。そこで本研究では、幼児の日常にとってより馴染みのある空想上の存在を取り上げ、その存在に見られていることの意識が道徳行為の実践を促すのかどうかを検討することを目的とする。具体的には、幼児にとって人気の絵本であり、家庭でもよく読まれている絵本『ねないこだれだ』（せなけいこ作・絵、福音館書店）に登場する「お化け」を空想上の存在として取り上げる。子どもはお化けに見られていることを意識した時に、誰からも見られていることを意識していない時と比べて、道徳行為をより実践するののかどうかについて実験的に検討する。

また、Piazzaら（2011）の研究では、空想上の存在（プリンセス・アリス）を信じた子どもは、それを信じなかった子どもよりも、違反行為をより抑制した。従って、お化けの存在を信じている子ども、すなわち、空想上の出来事を現実不起り得ることとして信じている子どもほど、お化けの絵を提示された時、お化けに実際に見られているという意識が働き、違反行為をより抑制することが考えられる。そこで本研究では、子どもの空想と現実の区別についての認識を測る課題も併せて実施し、この点について検討する。

最後に、先行研究（e.g., Piazza et al., 2011; Subbotsky, 1993; 杉村ら、1998）では、年長の子どものほど、違反行為への誘惑にさらされた時にそれを上手く抑制できることが示されている。そこで本研究では、幼稚園の年少児（3-4歳児）と年長児（5-6歳児）とを比較し、この点についても検討する。

方 法

被験児

津市内F幼稚園に通う3歳児クラスの幼児10名（男児2名、女児8名、平均年齢4歳2ヶ月、年齢範囲3歳10ヶ月～4歳7ヶ月）、5歳児クラス16名（男児7名、女児9名、平均年齢6歳3ヶ月、年齢範囲5歳7ヶ月～6歳7ヶ月）が対象であった。被験児はまた、誘惑課題において「お化けの絵」に監視される監視条件13名（3歳児5名、5歳児8名）とそのような監視役がない統制条件13名（3歳児5名、5歳児8名）に分けられた。

材 料

誘惑課題で使用する玩具には、「ふわふわおさかなキャッチ」（PAVILION製）という玩具を使用した。これは、電源を入れると筒状の容器に入れられた紙製の魚が吹き上げられ、その吹き上げられた魚が落ちてくるところを網で捕まえて遊ぶというものである。また、監視条件における監視役の「お化けの絵」には、せなけいこ作・絵『ねないこだれだ』（福音館書店、1969）に登場するおばけの絵を額縁に入れて使用した。

また、空想／現実の区別課題では、富田（2004）で使用された絵本の中の空想上の出来事の絵6枚（例：「少年が火を吹くドラゴンと出会う」「服を着たネズミが朝食の支度をしている」）と現実の出来事の絵6枚（例：「少年たちが動物園でカバを見ている」「幼稚園で子どもたちが服を着替えている」）の計12枚を使用した。練習課題用に空想上の出来事の絵1枚と現実の出来事の絵1枚も併せて使用した。また、空想／現実の判断を求めるために、「○」が描かれたカードと「×」が描かれたカードをそれぞれ用意した。これらは、全てA4サイズ、白黒であった。

さらに、実験の様子を記録するためにビデオカメラ2台と、実験中の会話を記録するためにICレコーダー1台を使用した。ビデオカメラは被験児の表情や視線、身体の動き、玩具に対する行動を記録するために、被験児の座席の斜め正面と斜め後ろに設置した。被験児に気づかれないように、ビデオカメラの周りは段ボールや布で覆われた。

手続き

実験は幼稚園内の静かな部屋で個別に行われた。被験児は部屋に入ると、空想／現実の区別課題、誘惑課題の順に実験に従事した。以下、手続きの詳細について述べる。

空想／現実の区別課題： まず、実験者は被験児にこれからいくつかの絵を見せること、それらの中には

現実に起こり得るものと現実に起こり得ないもののが含まれることを伝えた。次に、対象児に○と×の描かれた2枚のカードを見せ、提示する絵が「本当に起きたっておかしくない」と思えば○、「本当に起きたらおかしい」と思えば×のカードの上に手を置くように教示した。カードの上に手を置く練習をした後、課題とは無関係の2枚の絵による練習課題を行い、最後に本課題として12枚の絵を無作為な順序で提示した。

誘惑課題： 空想／現実の区別課題が終了した後、誘惑課題を実施した。実験は、①玩具の紹介、②実験者の不在、③実験者の帰還とインタビュー、という3段階で構成された。

まず、実験者は被験児に「新しい玩具を買ったから、一緒に遊ばない？」と言いながら、玩具の箱を見せ、「これはすごく面白い玩具なんだよ。今から準備するから用意できるまで後ろを向いて玩具を見ないでね」と言い、被験児の背後に置かれた机の上に玩具を置いた。そして、玩具を置き終わると、被験児に「あ！お姉さん、玩具の遊び方が分からなくなっちゃったから、ちょっと聞きに行ってくるね。すぐ戻って来るから、それまで玩具を見ないで待っていてね」と言い、子どもに後ろを振り返って玩具を見てはいけないことを約束させた。お化け条件では、「玩具を見ないかどうか、このお化けに見てもらうね」と言い、お化けの絵を被験児の正面にある椅子の上に置いた。統制条件では、このような教示も絵の配置もなかった。その後、実験者は被験児を残して部屋を退室し、その間の被験児の様子は隠しカメラで記録した。

3分後、実験者は部屋に戻り、被験児に「お姉さんがいない間、振り返って玩具を見ちゃったかな？ それとも振り返らずに玩具を見ないで待っていたかな？」と尋ねた。「見ていない」と答えた被験児には、「本当に見ていない？」と再度確認の質問を行った。その後、実験者は被験児と玩具で5分間遊び、最後に、実験の内容を他の友達には内緒するように伝えて、実験を終了した。

本実験は行うにあたって事前に園長、副園長、担任

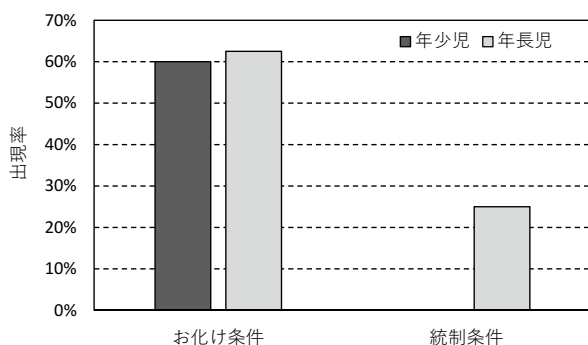


Figure 1 違反行為の抑制の出現率

教諭に調査内容を説明し協力を求め、了解を得た上で実施した。実験者（第2著者）は当該の幼稚園で4週間の実習を行っており、また授業での観察やボランティア等で被験児を含む園児たちと日常的に触れ合うなど、ラポールは十分に形成されていた。なお、統計処理にはjs-STAR version 9.0.9jを使用した。

結果と考察

違反行為の抑制における空想上の存在の影響

違反抑制者の出現率： 違反行為の抑制における空想上の存在の影響について検討するために、実験者不在時に子どもが後ろを振り返って玩具を見たかどうかを調べた。具体的には、一度でも後ろを振り返って玩具を見た者を「違反行為者」、一度も後ろを振り返って玩具を見なかった者を「違反抑制者」として分類した。

Figure 1 は違反抑制者の出現率を条件別及び年齢別に示したものである。違反抑制者の出現度数(%)は、お化け条件・年少児3名(60%)、お化け条件・年長児5名(63%)、統制条件・年少児0名(0%)、統制条件・年長児2名(25%)であった。条件差に関して、2(条件)×2(違反あり/なし)の χ^2 検定を行ったところ、有意差が確認された($\chi^2(1)=4.06, p<.05$)。お化け条件では統制条件よりも違反抑制者が有意に多いことが示された($p<.05$)。また、年齢差に関して、2(年齢)×2(違反あり/なし)の χ^2 検定を行ったところ、有意差は見られなかった($\chi^2(1)=0.08, n.s.$)。以上から、空想上の存在を意識することは違反行為を抑制させる効果があることが示唆された。

違反行為の出現までの反応潜時： 空想上の存在を意識した場合、子どもは違反することを躊躇して、違反行為の出現がより遅くなるのであろうか。その点について検討するために、違反行為の出現までの反応潜時について分析を行った。実験者が退室してからの3分間のうち、違反行為が出現した時点での秒数を違反潜時得点として算出した。違反行為が出現しなかった場合は180点となる。Figure 2 は違反潜時得点の平均値

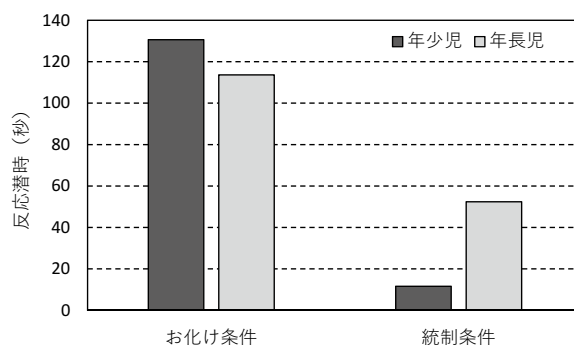


Figure 2 違反行為の出現までの平均反応潜時

を条件別及び年齢別に示したものである。違反潜時得点の平均値 (SD) は、お化け条件・年少児 130.6 (63.3)、お化け条件・年長児 113.6 (85.7)、統制条件・年少児 11.6 (7.8)、統制条件・年長児 52.4 (73.9) であった。違反潜時得点を従属変数として 2 (条件) × 2 (年齢) の 2 要因の分散分析を行ったところ、条件の主効果が有意であった ($F(1, 22)=8.95, p<.01$)。HSD 法による多重比較の結果、お化け条件は統制条件よりも得点が有意に高いことが示された ($p<.01$)。また、年齢の主効果と条件 × 年齢の交互作用は有意でなかった ($F(1, 22)=0.16, n.s.; F(1, 22)=0.92, n.s.$)。以上から、空想上の存在を意識することは違反行為を躊躇させる効果があることが示唆された。

しかし、これらの分析では違反抑制者の得点 (180 点) も含まれていることから、違反行為者がどの時点でその行為を行ったのが明確でなかった。そこで、違反行為者のみに限定してさらなる分析を行った。その結果、お化け条件では 5 名中 3 名が 15 秒以内に違反行為を行い、最も早かった者はわずか 1 秒であった。残りの 2 名は 27 秒と 1 分 26 秒であった。他方、統制条件では 11 名中 9 名が実験者退室後 15 秒以内に違反行為を行い、残りの 2 名も 30 秒以内に違反行為を行っていた。最も早かった者は 3 秒であり、最も遅かった者は 25 秒であった。平均値 (SD) を比較すると、お化け条件 24.4 (35.9)、統制条件 10.6 (7.7) というように、お化け条件の方が統制条件よりも反応潜時が長かった。このことは先述の結果と同様に、空想上の存在を意識することが違反行為を躊躇させることにつながることを再度支持するものであった。

違反行為の出現回数： 空想上の存在を意識した場合、子どもは違反することを躊躇して、違反行為の出現回数もより少なくなるのであろうか。その点について検討するために、違反行為の出現回数について分析を行った。違反行為が出現するごとに 1 点を加算して違反回数得点を算出した。違反回数得点の平均値 (SD) は、お化け条件・年少児 1.0 (1.7)、お化け条件・年長児 1.0 (1.7)、統制条件・年少児 2.0 (0.6)、統制条件・年長児 2.1 (1.9) であった。違反回数得点を従属変数として 2 (条件) × 2 (年齢) の 2 要因の分散分析を行ったところ、条件の主効果、年齢の主効果、及び条件 × 年齢の交互作用のいずれも有意でなかった ($F(1, 22)=2.51, n.s.; F(1, 22)=0.01, n.s.; F(1, 22)=0.01, n.s.$)。また、反応潜時と同様に、違反行為者のみの分析を行ったところ、お化け条件では 5 名中 4 名が違反行為を 2 回以上行い、そのうち 2 名が 3 回以上行った。最も多い者は 5 回であった。他方、統制条件では 11 名中 9 名が違反行為を 2 回以上行い、そのうち 3 名が 3 回以上行った。最も多い者は 6 回であった。平均値 (SD) を比較すると、お

化け条件 2.6 (1.5)、統制条件 2.5 (1.4) というように、違いは見られなかった。以上から、空想上の存在を意識することは、違反行為の出現回数を減退させることには効果がないことが示唆された。

違反行為への従事時間： 後ろを振り返って玩具を見る時、それはほんの一瞬なのか、それともじっくりと長いのであろうか。違反行為者における違反行為への従事時間の平均値 (SD) を算出したところ、1 回につき 4.3 秒 (5.0) であった。全体 40 回のうち、ほんの一瞬 (1 秒) が 17 回 (42.5%)、5 秒以内が 14 回 (35%)、15 秒以内が 7 回 (17.5%)、30 秒以内が 2 回 (5%) であり、最大は 24 秒であった。5 秒以内が 77.5% を占めたことから、子どもの違反行為は多くの場合、ほんの短い間であったことが分かる。平均値 (SD) を条件間で比較すると、お化け条件 3.9 秒 (2.6)、統制条件 4.4 秒 (5.9) でほぼ違いはなかった。しかし、年齢間では、年少児 6.3 秒 (7.1)、年長児 3.1 秒 (2.7) というように、年少児の方がよりじっくりと見る傾向があった。また、1 人が違反行為に従事する総時間の平均値 (SD) は、10.7 秒 (11.5) であった。違反行為者 16 名のうち、5 秒以内が 6 名 (37.5%)、15 秒以内が 6 名 (37.5%)、30 秒以内が 3 名 (18.8%)、45 秒以内が 1 名 (6.3%) であり、最少が 1 秒、最大が 44 秒であった。全体としても 15 秒以内が 75% であり、違反行為への従事時間は短かったことが分かる。平均値 (SD) を条件間で比較すると、お化け条件 10.2 秒 (6.1)、統制条件 10.9 秒 (13.5) でほぼ違いはなかった一方で、年齢間では、年少児 13.4 秒 (15.2)、年長児 8.6 秒 (7.9) というように、やはり年少児の方がよりじっくりと見る傾向があった。年長児における違反行為への従事時間の短さは、彼らが年少児よりも道徳や規範をより内面化しており、そのことで違反行為に対してより強く後ろめたさを感じた結果とも解釈できよう。

違反行為後の正直さ： 空想上の存在を意識した場合、子どもは仮に違反したとしても後ろめたさを強く感じ、その後に正直な態度をより多く示すのであろうか。その点について検討するために、違反行為を行った後の正直さについて分析を行った。実験者は部屋を 3 分間不在にして帰還した後、実験者不在中に後ろを振り返って玩具を見たかどうかを子どもに尋ねた。その回答は実際の行動との関連で吟味され、特に子どもが違反行為を行った後で、そのことを実験者に正直に話すかどうかを検討された。分析の結果、違反行為を行った 16 名のうち、そのことを正直に報告した者はほんの 3 名に過ぎなかった。残りの 13 名はいずれも「見ていない」と報告した。空想上の存在を意識した者ほど、あるいは年長児ほど、自らの違反行為について正直に報告したのかと言えば、そうではなかった。3 名は全て

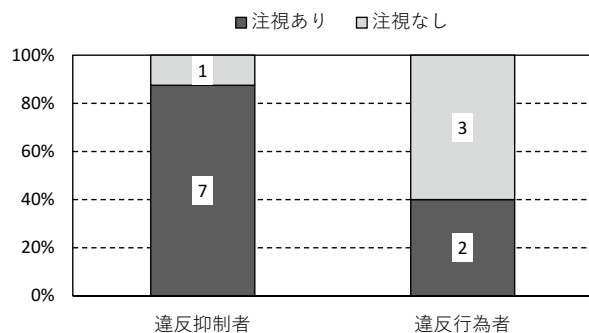


Figure 3 違反行為の抑制と空想上の存在への注視との関連

統制条件の子どもであり、3名中1名は年少児であった。以上のように、本研究の結果からは、空想上の存在を意識することが違反行為後の正直さを促進するといった効果は確認されなかった。

空想上の存在への注視： お化け条件において何人かの子どもは、実験者不在中にお化けの絵を注視して、それにより違反行為を抑制しようとする素振りが見られた。空想上の存在の絵を見ることは、その存在への意識をより高め、違反行為の抑制をより促すのかもしれない。その点について検討するために、お化け条件において、実験者不在中にお化けの絵を注視した子どもとそういう姿を示さなかった子どもとを分類し、違反行為の抑制との関連を検討した。Figure 3は、違反抑制者/違反行為者と空想上の存在への注視の有無との関連を示したものである。お化けの絵を注視した違反行為者は5名中2名(40%)であったのに対し、違反抑制者は8名中7名(87.5%)であった。違反抑制者に関して二項検定(両側検定)を行ったところ、お化けの絵を注視した者が有意傾向で多いことが示された($p < .10$)。また、違反行為者でお化けの絵を注視した者のうち、1名(5歳児)はほんの一瞬(1秒)見ただけであり、もう1名(3歳児)は3回で合計11秒見ていたが、違反行為の出現まで27秒もかかっていた。このことから、たとえ違反行為に至った者でも、お化けの絵を見ることは彼らにその存在に対する意識を高め、違反行為を躊躇させるに十分な効力があったことがうかがえる。以下に、お化けの絵を注視して違反行為を抑制した2つの事例を示す。

【事例1】(年少女児) 少し微笑む(0' 15")。目線だけ横に向けるが、振り向く様子はない(0' 37")。振り返りそうになるが耐え、お化けの絵の方を向いて微笑む(1' 00")。微笑む(1' 20")。溜息をつく(1' 48")。振り返りそうになるが耐える(2' 20")。自分がつけていたマスクを触って気を紛らわせる(2' 50")。

【事例2】(年長女児) 実験者が出ていった瞬間、笑顔が消え、お化けの絵をチラチラ見る。時折お化けの絵を見ながら、じっと座っている。少し微笑む(1' 22")。

振り向きそうになるが耐える(1' 33")。振り向きそうになるが耐える(2' 16")。ギョッと目をつむる(2' 25")。

ともに何度か後ろを振り返って玩具を見そうになるが、お化けの絵を見てそれを意識することで耐えていることが分かる。時折見せる微笑も、お化けに対する「安心して。見ていないわ」というサインのようにも見える。このように、空想上の存在の絵を見ることは、幼児においてその存在への意識を高め、違反行為の抑制を促すことにつながるものと考えられる。

空想/現実の区別の認識との関連

空想上の存在を意識することによる違反行為の抑制において、空想/現実の区別の認識が関連しているかどうかについて検討するために、空想/現実の区別課題を実施した。現実の出来事に対して「本当に起きたっておかしくない」、空想上の出来事に対して「本当に起きたらおかしい」と判断した場合に正答として1点を与えた。そして、その逆の判断を行った場合または「わからない」と回答した場合に0点を与えた(得点範囲は0-12点)。各平均値(SD)は、お化け条件・年少児8.8(1.3)、お化け条件・年長児10.1(1.4)、統制条件・年少児8.0(0.9)、統制条件・年長児9.0(1.4)であった。空想/現実の区別得点を従属変数として2(条件)×2(年齢)の2要因の分散分析を行ったところ、年齢の主効果が有意傾向であった($F(1, 22)=4.19, p < .10$)。HSD法による多重比較の結果、年長児は年少児よりも空想/現実の区別得点が有意傾向で高いことが示された($p < .10$)。また、条件の主効果と条件×年齢の交互作用は有意でなかった($F(1, 22)=2.87, n.s.$; $F(1, 22)=0.08, n.s.$)。以上から、先行研究(Taylor & Howell, 1973; 富田・原, 2006)と同様に、空想/現実の区別の認識能力は年少児から年長児にかけて高まること、また、空想/現実の区別の認識能力に条件間で違いがないことが確認された。

次に、お化け条件における違反行為の抑制との関連について分析した。子どもが違反行為を抑制した場合に1点を与え、違反抑制得点を算出し、空想/現実の区別得点との関連を検討した。その結果、相関係数は.098で有意な相関は確認されなかった(統制条件も-.283で無相関)。空想/現実の区別得点の平均値(SD)を比較すると、お化け条件における違反抑制者9.5(1.8)、違反行為者9.8(1.3)で違いは見られなかった。なお、統制条件では違反抑制者9.5(2.1)、違反行為者8.5(1.3)であった。以上から、空想上の存在を意識することによる違反行為の抑制において、空想/現実の区別の認識は特に影響を及ぼしていないことが示唆された。つまり、お化けが現実に出現するような空想上の出来事を信じるのが、目の前にあるお化けの絵による違反

行為の抑制の効果を高めるといった事実は確認されなかった。

総合考察

本研究の目的は、空想上の存在を意識することが、幼児による道徳行為の実践（違反行為の抑制）に影響するかどうかを明らかにすることであった。年少児 10 名と年長児 16 名を対象に、魅力的な玩具が背後に置かれ、後ろを振り返って見てはいけないという約束のもとに部屋に 1 人で残された間、約束を守って後ろを振り返らずにいられるか、約束を破って後ろを振り返ってしまうかが調べられた。その際、空想上の存在の影響を探るために、空想上の存在として子どもに人気の絵本に登場するお化けを取り上げ、その絵によって見られていると意識させられる条件（お化け条件）と誰にも見られていない条件（統制条件）とを設定し、比較した。

本研究の結果、空想上の存在を意識することは、違反行為の抑制を促したり、違反行為を躊躇させる効果があることが示された。空想上の存在を意識することの表れとしての空想上の存在を注視する行為は、違反行為を抑制した者に多く見られた。また、違反行為の抑制と空想上の出来事（例：火を吹くドラゴンに出会う）の現実性を信じることとの間には関連がなかった。Eysenck (1966) は、禁じられていることをどうしてもやりたいと思う時、その子の意思とは無関係に生じる、ある種の不安や恐怖こそが「良心」であると述べている。本研究において監視役として空想上の存在の絵を提示された子どもは、それが単に絵に過ぎないこと、あるいは現実に存在しないことを理解していたとしても、その存在を意識し想像することで、仮に違反行為をした場合に起こるかもしれない空想上の存在による罰を想像し、その不安や恐怖から違反行為を抑制したのかもしれない。

空っぽの箱の中に恐ろしい怪物を想像させた後、子どもを部屋に 1 人で残し、その間の子どもの行動を観測し、後にどんなことを考えていたかをインタビューした Harris, Brown, Marriott, Whittall, & Harmer (1991) の研究では、6 歳児でも怪物は実在しないし想像しただけに過ぎないことを理解しているにもかかわらず、1 人になると「もしかしたら…」という考えが生じ、箱の中を見たり探ったりしたことを報告している。こうした幼児期の子どもによる想像したことと現実、あるいは空想世界と現実との境界の揺らぎは、その後のいくつかの研究（e.g., Johnson & Harris, 1994; 富田, 2004; 富田・小坂・古賀・清水, 2003）でも確認されており、少なくとも 7 歳頃までは、表面的には懐疑主義者への道

を着実に歩みながらも、潜在的には揺らぎ易いことが明らかにされている。空想上の存在を意識し内在化させ、それに罰せられることへの不安や恐怖から違反行為を抑制するということは、道徳や規範の内在化による違反行為の抑制とは本質的に異なるものの、それは幼児期の終わりの外的統制から内的統制への過渡期にあって、有効な橋渡し役となるのではなかろうか。

空想上の存在を意識することが道徳行為の実践に及ぼす効果は、幼児期に限った話ではない。先述したように、大人であってもその種の存在を意識することで不正行為が抑制されたり（Bering et al., 2005）、他者に対してより寛容になったり（Shariff & Norenzayan, 2007）という効果が確認されている。こうした先行研究と本研究の違いは、意識する対象の違いであると考えられる。先行研究では幽霊や宗教的に聖なる言葉が対象であったのに対し、本研究では絵本に登場するお化けが対象であった。仮に後者の対象を大人に提示したとすれば、そこには恐らく効果が見られなかったであろう（ただし、大人は内面化された良心の声によって、違反行為を抑制するだろう）。

しかし、この点に関してはもう少し議論が必要である。なぜなら、意識する対象の違いの源泉が、仮にそれに対する空想／現実の区別の認識の違いにあるのだとすれば、空想上の出来事の現実性を信じていない者でもお化けを意識することで違反行為を抑制することができたという本研究の結果や、プリンセス・アリスの存在に懐疑的な者でも探索を通してそれが本当にいないという経験的根拠を得るまで違反行為を抑制し続けたという Piazza ら（2011）の結果は、矛盾することになるからである。これらの結果は、結局、対象を信じるか信じないかは道徳行為の実践に関係しないことを示している。空想上の存在は、それを信じるか信じないかは別にして、ただその存在を意識するだけで、人々に道徳行為の実践を促し得る存在なのかもしれない。この点については、今後さらなる検討が必要であろう。

最後に、本研究の限界と今後の課題について述べる。第 1 に、本研究では、空想上の存在を意識することの影響を探る上で、絵本に描かれたお化けの絵を子どもに提示した。これは、お化け自体が子どもの日常において馴染みのある存在であり、親との会話においても、例えば、就寝時間を子どもに順守させるために「遅くまで起きているとお化けが来るよ」と言うなど、しばしば用いられる存在であるという理由による。しかし、そうした日常場面において、絵は子どもの前にわざわざ提示されるわけではなく、多くの場合、口頭のみでやりとりされる。また、絵はその場にはいない存在についての表象を子どもに維持させることを可能にするという点で効果がある一方で、それにより子どもの想像

が制限される可能性があるという点で不利益がある。従って、今後の研究では、絵の提示のみならず、単に口頭で空想上の存在を意識させた場合やぬいぐるみやフィギュアの提示によってそれを意識させた場合などとの比較によって、道徳行為の実践に及ぼす影響を検討する必要がある。

第2に、本研究では、実験者が部屋に帰還後、部屋に1人で残されている間の違反行為の有無については尋ねたが、違反行為を抑制している間にどのようなことを考えていたか、そして、そこに空想上の存在を事前に意識することがどのような影響を及ぼしていたかを子どもの言語的回答によって探るというところを行わなかった。今後の研究ではそれらについても尋ねることで、違反行為の抑制における空想上の存在の影響の程度をより明確にすることが望まれよう。

第3に、本研究では、子どもの違反行為後の正直さと空想上の存在を意識することとの間に関連が見られなかった。これは多くの子どもが後ろを振り返って玩具を見るという違反行為をしたにもかかわらず、その事実を正直に報告しなかったことによるが、一方で本研究で取り上げたルール違反が子どもにとって軽微なものであり、あまり罪悪感を生じさせるものではなかったという点も、正直報告が少なかった理由としてあるのかもしれない。実際、本研究では、実験者は部屋を離れる際に「玩具を見ないで待っていてね」とは伝えたものの、「絶対に見てはいけない」「約束してね」など、ルール順守を強調する教示は行わなかった。今後はこうしたルール順守を強調する教示を加えることで、子どものルール違反に対する罪悪感を高め、その上で違反行為後の正直さに空想上の存在を意識することがどのように関連するかを探る必要がある。

大人が子どもとの日々の生活の中で何らかの約束事を順守させたいと願う時、お化けなどの空想上の存在を取り上げて、それを意識させ、その存在による罰の不安や恐怖を高めることによって、約束事を順守させようとするのはしばしば行われることである。これらはややもすると「脅し言葉」となり、その程度が過度に強過ぎたり、その方法が過度に不安や恐怖をあおるものである場合には、子どもに不信感や恐怖症などネガティブな影響を及ぼすことは十分に考えられる。本研究の立場は、これらを是とするものでは決してない。あくまでも子どもが道徳や規範を内面化するという現実への適応プロセスを幼児期の終わり頃から少しずつ歩んでいく過渡期において、空想上の存在を子どもと大人がともに意識し、その世界を楽しみながら共有することで、子どもの発達そのものを後押ししていくという役割を、空想上の存在に期待するものである。本研究がその一助となることを願っている。

付 記

本論文は、第二著者による三重大学教育学部2016年度卒業論文で得られたデータを再分析し、新たに論を展開したものです。調査にご協力いただいた幼稚園の先生方及び幼児の皆さんに深く感謝申し上げます。

引用文献

- Bering, J. M., McLeod, K., & Shackelford, T. K. (2005). Reasoning about dead agents reveals possible adaptive trends. *Human Nature*, *16*, 360–381.
- Eysenck, H. J. (1966). *犯罪とパーソナリティ* (MPI研究会, 訳). 誠信書房.
- Harris, P. L., Brown, E., Marriott, C., Whittall, S., & Harmer, S. (1991). Monsters, ghosts, and witches: Testing the limits of the fantasy-reality distinction in young children. *British Journal of Developmental Psychology*, *9*, 105–123.
- 岩田純一. (1998). *〈わたし〉の世界の成り立ち*. 金子書房.
- Johnson, C. N., & Harris, P. L. (1994). Magic: Special but not excluded. *British Journal of Developmental Psychology*, *12*, 35–51.
- 神田英雄. (2004). *3歳から6歳：保育・子育てと発達研究をむすぶ 幼児編*. ちいさいなかま社.
- Mischel, H. M., & Mischel, W. (1983). The development of children's knowledge of self-control strategies. *Child Development*, *54*, 603–619.
- Piazza, J. R., Bering, J. M., & Ingram, G. P. D. (2011). "Princess Alice is watching you": Children's belief in an invisible person inhibits cheating. *Journal of Experimental Child Psychology*, *109*, 311–320.
- Samuels, A., & Taylor, M. (1994). Children's ability to distinguish fantasy events from real-life events. *British Journal of Developmental Psychology*, *12*, 417–427.
- Shariff, A. F., & Norenzayan, A. (2007). God is watching you: Priming god concepts increases prosocial behavior in an anonymous economic game. *Psychological Science*, *18*, 803–809.
- Subbotsky, E. V. (1993). *The birth of personality*. Harvester Wheatsheaf.
- 杉村智子・古野美和子・平木文子. (1998). 幼児の嘘つき行動に及ぼす他者認識の影響. *福岡教育大学紀要*, *47*, 183–189.
- 富田昌平. (2004). 幼児における想像の現実性判断と空想／現実の区別認識との関連. *発達心理学研究*, *15*, 230–240.
- 富田昌平・原 充代. (2006). 幼児における空想／現実の区別の認識. *幼年教育研究年報*, *28*, 51–59.
- 富田昌平・小坂圭子・古賀美幸・清水聡子. (2003). 幼児による想像の現実性判断における状況の迫真性、実在性認識、感情喚起の影響. *発達心理学研究*, *14*, 124–135.
- Taylor, B. J., & Howell, R. J. (1973). The ability of three-, four-, and five-year-old children to distinguish fantasy from reality. *Journal of Genetic Psychology*, *122*, 315–318.
- Yates, G. C. R., Lippett, R. M. K., & Yates, S. M. (1981). The effect

of age, positive affect induction, and instructions on children's delay of gratification. *Journal of Experimental Psychology*, **32**, 1–16.

Yates, G. C. R., Yates, S. M. & Beasley, C. J. (1987). Young children's knowledge of strategies in delay of gratification. *Merill-Palmer Quarterly*, **3**, 159–162.